

記 事

◎通常総会

昭和 30 年 5 月 28 日午後 1 時より福岡市電気ビル大ホールで開催し、会員約 400 名の出席をえて盛会であつた。会の次第は次のとおりであつた。

江里口総務部長開会のことばを述べ、青木会長議長席につき、

昭和 29 年度事業報告 (別掲、江里口総務部次長)

昭和 29 年度決算報告 (別掲、飯田経理部長)

昭和 29 年度土木賞授与

吉田土木賞委員長より土木賞委員会の経過説明のうち、別掲の授賞理由の朗読があり、つづいて青木会長より受賞者 3 名に対し賞状の授与が行われた。

新任役員の紹介 青木会長より昭和 30 年 5 月 25 日常議員会で選挙決定した昭和 30 年度新任役員の紹介が行われた (別掲参照)。

会長講演 (別掲)

次いで福岡県知事並びに九州市長協議会会長よりのメッセージを受け、江里口次長の閉会のことばをもつて総会をとどこおりなく終了した。

福岡県知事土屋香鹿氏祝辞

若葉爽やかな 5 月を期し、今回本県において全国土木技術関係者を網羅する土木学総会が開催されますことを、光栄に存じ、県民を代表しまして心から歓迎のことばを申し上げる次第であります。

本県は日本産業の心臓部として自負するものでありますが公共施設その他未開発のものが少なくなく、ことに昭和 28 年 6 月の大洪水の後、その復旧も意のごとく進まず創疾生々しいものがあり、各界の御協力御鞭撻を待つものが多い状態であります。何卒本会を期としまして会員各位の御努力御研鑽によつて本学会が日進月歩の理論と技術進展になお一層貢献せられ、もつて国運の進展並びに人類の福祉増進に寄与せられんことを深く祈念する次第であります。地元といたしまして準備万端不十分にて、歓迎の意をつくし得ないことを残念に存じますが、幸い御日程の御都合のつくかぎり県内を御視察賜わり御叱正の機を得ましたならば望外の幸せとする次第であります。

第 50 回九州市長協議会会長 八幡市長守田道隆氏
メッセージ

土木学会通常総会並びに第 11 回年次学術講演会が福岡市において開催せらるるに当りメッセージをお送りする機会を得ましたことは特に土木学会の正会員である私の喜びとするところであります。

わが国は戦後すでに 10 年を経て産業経済等いちじるしい復興を遂げ運輸交通の面においても戦前の最盛期をしのぐに至りました。ことに建設方面では道路の改築、河川、港湾の改修、戦災復興、水力電気の建設等、国土再建の基礎として大きく前進していることは慶賀にたえないところであります。

わが北九州並びに筑豊炭田地方は先に政府によつて特定地域“鉱工地区”として指定され、国土総合開発法により開発されることに決定を見、今後土木工学に期待するところますます大なる今日、たまたま本総会を当地方に迎えた意義はきわめて深く、ここに土木学会がよく世界の進運とともに向上発展し、もつて広く国運の興隆に貢献されることを切に希望し、あわせて会員各位の御健闘を衷心からお祈りする次第であります。

◎懇親会

通常総会、講演会 (第 1 日) に引続き、午後 6 時 30 分より福岡市岩田屋デパート食堂で行われた。伊藤西部支部長の挨拶に続いて藤井副会長に代つて飯田経理部長が会員を代表して青木会長を送り菊池新会長を迎

写真—1 懇親会場



写真—2 懇親会場における都舞舞台風景



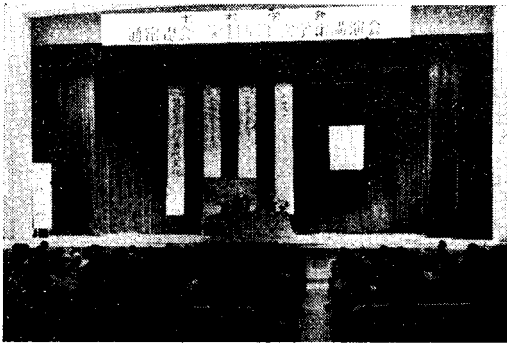
える言葉を述べ、青木会長、菊池新会長よりそれぞれ辞任と就任の挨拶があり会食に入る。出席者は来賓を含めて189名、長老より新進に至るまで親しく酒盃を交えて、なごやかな談笑の声が会場を充した。

デザートコースに入り、伊藤支部長の司会で学会の古坂田荒尾市長を皮切りに、土木賞受賞者星埜氏、後藤氏の挨拶があり、続いて各地区を代表して北海道の真井氏、東北の宮本氏、中部の杉戸氏、近畿の近藤泰夫氏、中四の近藤勇氏、西部の田中氏がそれぞれテーブルスピーチを行つた。続いて福岡県観光連盟寄贈の郷土舞踊「都舞」の披露があつた。良家の子女が、尺八の音につれて舞い出す典雅にして優美な姿に、満場ただ魂を奪われたかの観があつた。最後に吉田徳次郎先生の発声で土木学会の万才を三唱し8時散会した。

◎第11回年次学術講演会

通常総会に引続き午後2時30分より同会場で年次学術講演会(第1日)が開催された。恒例のごとく土木賞受賞者3氏の講演が行われ、続いて特別講演として、九大名誉教授長沼賢海氏による「筑紫平野の古代文化」が興味深く話され、多大の感銘を与え、午後5時過ぎ終了した。

写真-3 講演会場(第1日)における
長沼氏の特別講演



第2日29日は午前8時30分から九州大学工学部本館において行われた。今回は講演申込数183件という多きにのぼり、会場も昨年、一昨年より一会場増加し、8会場にわかれて行われた。特に土質および基礎、橋梁および構造物は申込み多く、それぞれ一会場におさまらず、2会場に分けることを余儀なくされたが、残念がる聴講者の声もきかれた。

各会場の部門、講演数および司会者は次のとおりである。

第1会場(応用力学)

講演数:20

司会者:吉村虎蔵,村上永一,重松愔,村上正

第2会場[橋梁および構造物(I)]

講演数:23

司会者:富谷巖,平野巖,川上暢夫,山崎徳也

第3会場[土質および基礎(I)]

講演数:22

司会者:内田一郎,渡辺蘂,水野高明,園田頼孝

第4会場[土質および基礎(II)・施工および土木機械・橋梁および構造物(II)]

講演数:20

司会者:古賀雷四郎,森田定市,田中俊徳,住友彰

第5会場[水理学]

講演数:23

司会者:秋竹敏実,藤芳義男,穂積健茂,篠原藤爾

第6会場[河川および砂防・衛生工学・発電水力]

講演数:23

司会者:川上謙太郎,田中吉郎,和里田新平,小林幸治

第7会場[材料・コンクリート]

講演数:24

司会者:伊吹山西郎,田代信雄,加賀美一二三,吉田彌七

第8会場[港湾・道路・鉄道]

講演数:20

司会者:山東盛彦,望月一輔,渡辺寛治,根来幸次郎

この日は晴天に恵まれ、聴講者は午前10時~11時頃までには各会場平均60~70名程度となり、二、三の会場では100名を超える盛況を呈し、幻灯、映写などもまじえて、それぞれの分野の理論的、実験的、あるいは現場の諸問題について、熱心なる研究発表が行われ、討論もまた盛んに行われた。

関係者一同、日頃多い爆音のため、講演の進行に支障を来すことを心配したが、この日は日曜のせい、わりに少なく、万事都合であつた。また会場前にはメーカー数社の機械、写真などの展示が並び、参会者の興味をひいていた。

聴講者総数約600名で、例年と同じ印刷部数の講演概要が当日売切れたほどで、きわめて盛大なる会であつた。定刻午後5時50分には全講演を無事完了、第11回年次学術講演会を終了した。

◎見学会(5月30,31日)

総会、年次学術講演会に引続き恒例の見学会が30,31の両日にわたつて下記5班に分れて行われた。

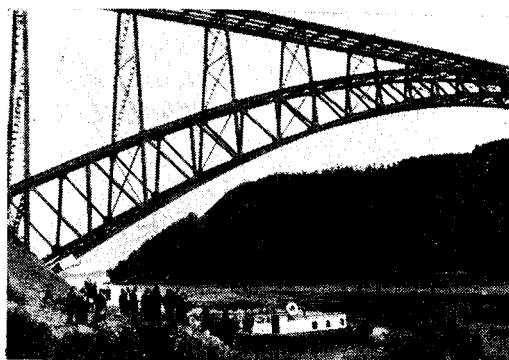
A班(伊之浦橋班)

30日博多発8時12分普通列車及び10時17分急行西海で西下したA班会員は、青木前会長始め100余名、13時早岐駅前より3台のバスに分乗して伊之浦

橋（西海橋）の架設現場に向った。気遣われた天候も薄曇りにときどき青空がのぞき、絶好の見学日和である。バスに同乗した建設省伊之浦橋工事事務所所員のアーチ閉合方式の説明や架設中の応力調整の苦心談を聞きながら、針尾島の羊腸たる坂道をバスは快音を響かせて上つてゆく。左手の眼下に、大村湾の白砂青松新緑したたる島々を眺めながら、13時40分現場に到着した。

大村湾口を扼する伊之浦の瀬戸は、巾約30m、水深40m、最大潮流9ノットで、沸き立つごとく奔流する渦潮はまことに凄絶である。この瀬戸を一跨ぎにして、橋面工事のみを残し完成を間近に控えた伊之浦橋が横たわっている。

写真—4 伊之浦橋を見学する一行



本橋の架設計画は、昭和10年頃より地元からしばしば提案され、長崎県当局においても一般県民の要望に応じて、昭和15年長崎県管道路改修継続事業とともにこの橋の架設費を追加決議したのであるが、戦時中のため実施の運びに至らなかつた。昭和21年に至り、12月の県議会で22年度予算に調査費を計上し、昭和23年度より橋梁工事の前提として取付道路の国庫補助工事に着手した。昭和25年度に至り対日援助見返資金が本工事に支出されることになり、本格的な着工をみるに至つたのである。

本橋は、

橋長 316.26 m 中央径間 244 m (支間 216 m)
側径間 72.26 m (2 @ 36.13 m)

有効巾員 7.50 m

橋梁型式 中央径間 上路式構肋鋼固定アーチ
側径間 鉄骨コンクリート2径間ラーメン

取付道路 延長 2545.45 m

針尾側 460 m

大串側 2085.45 m

架設工事は建設省直轄工事として、横河橋梁製作所によつて行われた。海中に1本の支柱も設置し得ない

ため、鋼索の精密操作による突桁式吊出架設法により行われ、アーチの閉合の際は、300tジャッキ8台を駆使して予応力添加を行い、アーチの応力分布を改善する新工法がとられたのである。

会員一同細部にわたつて見学を終り、15時世期の一大工事を後にした。案内嬢の流暢な説明を聞きながら、車窓に展開する初夏の風物を賞でつつ、バスは一路長崎へ……。

18時長崎市に着くやただちに知事及び市長の招待歓迎の四海楼における宴に臨む。知事の歓迎の言葉に次いで、会員を代表し青木前会長立つて長崎の歴史を讃え、近代都市としての発展を祝福して謝辞を述べ、宴に入る。一同本場の支那料理に舌つづみをうちつつ、談笑の声堂に満つ。宴たけなわにして長崎のきれいどころが郷土舞踊を披露すれば、青木前会長を始め各地区の代表自慢の喉をふるい、長途の旅の疲れを一瞬に忘れるかの観があつた。

19時30分長崎県及び長崎市の万才を三唱し、バスに分乗してそれぞれの宿舎に入り、古都長崎をしのびつつそれぞれ夢路をたどつたのである。

翌31日8時30分再びバスに分乗し、グラバー邸にお嬢夫人をしのび、大浦天主堂にキリスト教弾圧に殉じた36聖人を思いつつ、長崎市内の見学を行つた。支那寺として高名な崇福寺、原爆中心地、永井博士住居、浦上天主堂、と感銘深く見終つて、11時長崎駅前2日にわたる見学会を解散した。

その後希望者のみバス2台に分乗し、泉郷雲仙へ向つた。

(下川幹事 記)

B 班 (筑後川班)

朝7時30分西鉄福岡駅前に臨時に設けられた受付子の周囲には早や三々五々参加者が集合し今日これからの行程について話しに花を咲かせている。定刻8時30分案内人3名を含めて総員22名、西鉄から向けられたバスに乗り込み第一の目的地大宰府に向つて出発。

天気はまづ上々だし西鉄の特別の計いで全国コンクールに選抜されたという美人ガイドさんの説明で一行の旅行気分はますます横溢、申し分のない滑り出しである。坦々と舗装された国道を山の手でそれ県道に沿つて左に観世音寺の鐘声をしのび右に菅公配所の跡を望んで暫時車にゆられると一の鳥居に達する。ここはいうまでもなく菅原道真公を祭神とした学問の社で、飛梅に古歌をしのびまだいささか早い今は九州にただ1カ所といわれるあやめの池を賞で、両側に立ち並んだ物売りの呼び声におくられながら再びバスの人となり次の目的地朝倉築堤に向う。現場に入る街角でバスを捨て筑後川工事事務所の御好意で用意されたジ-

プ3台に分乗して、竣工なり雨季を待つ朝倉築堤災害復旧工事を見学する。ここは昭和28年6月末筑後川をおそつた災害のうち最も被害の大きかつた箇所で破堤延長700mに達し、その復旧費も3億円強の巨額にのぼっている。

いかにも現場マンらしい出張所長さんから破堤当時の状況、工事の概要、施工の苦心談等懇切な説明を受け、この工事の特徴である透過式コンクリート水制の撮影にそれぞれカメラの腕を競つて工事の細部まで見究めようとする熱心な参加者を時間を気にした案内子がせき立て再びバスに乗車、昼食場所原鶴温泉小野旅館に到着したのはちょうど12時であつた。この地でとれる鮎に舌つづみを打ちつつ案内子から筑後川の河川計画について説明を聞いて小休止ののち、大石堰復旧工事現場に向つたが、時間の都合で杷木町昭和橋上から3億4000万円を要したこの工事を望んだにとどめて、九電夜明発電所前で一同車を降りた。ここで所員の方の説明を聞いてこれだけの施設(最大出力12000kW)を3人の勤務員で操作しているという近代技術の粋に今更のように感嘆し、それぞれ専門の部門について知識を吸収して、今度のおもな見学目的地の最後である夜明ダムに向つた。夜明ダムで一同記念撮影を行いこの工事を担当された九電浅田氏から災害当時の状況及び工事の概要について詳細な説明を受け、また筑後川河川計画立案にさいしてもこちら一帯は非常に重要な意味を持つているむね案内子から付加説明があつて、一昨年出水以来一躍有名になつたダムを眼前に、一同百聞は一見にしかずの諺を如実に体験して午後3時再びバスに乗り込みこの地を出発した。これより車は流れにそつて日田の水郷を通り大山川、玖珠川の合流点を右に、天が瀬温泉郷を左にして、あるいは林相美しい山肌を、あるいは碧潭奔る溪谷を車窓に写しながら上りに上る。この頃からガイドさんの美しい民謡

写真-5 夜明ダムを見学する会員



を皮切りに参加者一同のお国自慢、のど自慢が始つてバス内は正に春風駘蕩、車のゆれも苦にならない。水分峠を過ぎ由布盆地に入る頃から薄暮あたりにたれこめ、美しく雄大な城島高原を過ぎると別府の灯が招くがごとく車窓に飛び込んできた。湯の香を風に感ずる後背地温泉郷の山道を下つて今宵の宿九電別府保養所に到着したのは定刻を約1時間廻つた20時30分で、早速一風呂浴びて汗と疲れを落とし、用意された小宴にのぞんで一同今日の旅を回想しながら寝については夜もかなりふけてからであつた。終りにこの見学旅行に際して各方面から寄せられた御好意に深謝して筆をおく。(小幡幹事 記)

C 班 (北九州班)

5月30日午前9時45分、八幡市枝光駅前集合、気遣われた天候も回復し絶好の見学日和。定刻10時受付を終つて3台のバスに分乗し、八幡製鉄所に向う。

八幡製鉄所は、炭量豊富な筑豊炭田に近く、かつ原料の受入れ及び製品の積出しに好適な洞海湾を持ち、172万坪の工場敷地には年間生産能力、銑鉄210万t(全国第2位)、鋼塊266万t(全国第1位)、鋼材233万t(全国第1位)の設備を持つている。

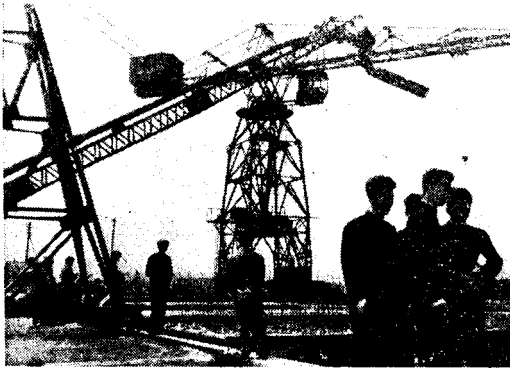
さすが東洋一といわれるだけあつて、林立する煙突からの煤煙は、北九州の空をどんよりとおおつている。車上20分にして溶鉄炉に到着、ちょうど都合よく出鉄に間に合い、灼熱せる銑鉄の奔出する壯観を見学できた。

溶鉄炉で作られた銑鉄は、混鉄炉を経て、製鋼工場に送られ、これにはほぼ同量の屑鉄と少量の銑鉄石、石灰石、マンガニ鉄石その他原料を加えて加熱精錬され、鋼になる。製鋼課長の説明で、平炉による精錬作業を見学、ただちに圧延工場に向う。平炉で作られた鋼塊は、分塊工場で所要の大ききの鋼片にされ、条鋼または鋼板類の圧延工場に送られる。

圧延工場では、ちょうどレールの圧延中で、われわれが日常使用している鋼材の製造工程の一端が、その見事な流れ作業によつてよくうかがわれ、2時間の間、見学は熱心に続けられた。定刻12時八幡製鉄中央船溜り第三海峽丸に移乗。ただちに弁当を配り中食をとる。12時半船溜発、172万坪の広大な製鉄所を背後にして、一路洞海湾内を進む。

洞海湾は天然の良港として、古くから発達した港で、特に鋼出炭量の32%にも及ぶ筑豊炭の積出港として栄え、またその石炭を基盤として発達した北九州工業地帯の心臓部に囲繞せられ、わが国屈指の大工業港を形成しており、入港船舶は神戸、横浜をはるかにしのぐわが国第一の4万数千隻を数え、貨物取扱量も、全国港

写真一六 運輸省洞海湾工事事務所若松港
ケーソンヤード



湾取扱貨物量の1割に及ぶ年間2000万tを数える。

大型船に交つて帆柱林立する機帆船の群、巨大なクレーンを手足のように働かせ石炭の積卸しを行つている貯炭場なども左右に眺見しながら、運輸省洞海湾工事事務所若松港ケーソンヤードに到着。ここには防波堤に使用するケーソン製作のためのスリップが作られており150tのケーソンを一度に6個製作できる。その機械化されたバッチャープラント、合理化されたコンクリート輸送設備など大いに学ぶべきものがあつた。

見学時間30分にして先を急ぎ再び乗船、洞海湾から本航路に出る。この本航路では-9.0m 拡巾浚渫のため巨大なバケット式浚渫船が動いている。港口から出るとたちまち船は左右に揺れ出す。好天とはいえ何しろ支海響灘の荒波は相当に高い。右手はるかに小倉を望見し、さらに進んで、右に門司、左に彦島を望むようになると荒波は相当静まり時速10ノットの快適な船旅は続く。関門海峡に入ると、洞海湾とはまた異なつた港の性格が感ぜられる。昔連合艦隊が悠々と通過したといふこの海峡は、現在水深-10m、将来さらに掘下げる計画があるそうである。

定刻15時、門司港の10m岸壁に到着、運輸省門司港工事事務所職員の出迎えを受け上陸。同岸壁に新設された三菱倉庫に入り、田の浦地区に施行された-9.0m岸壁の説明後、プレパクト工法の色彩映画を鑑賞。ちよつと時間があるので三菱倉庫を見学。同倉庫の荷役機械はスイスより輸入したchain conveyorを備え、日立のsemi-portable crane 2基を有した3階建ての豪華な建築である。15時半再びバス3台に分乗し、門司市内を通つて田の浦へ向う。

さきほど説明を聞いた田の浦岸壁は、現在駐留軍に接収されている10000t級2バースの代替施設として、安全保障費より支出されたもので、29年度に1バース、本年度1バース、6億の工費をもつて施工

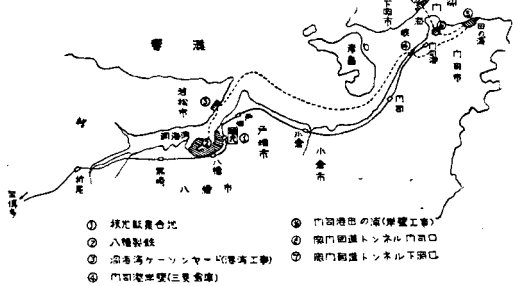
されたものである。本岸壁は、特殊型のコンクリート方塊を積み重ね、方塊の塊間充填にプレパクト工法を採用したもので、新しい工法といわれ、また防舷材にゴムを使用するという新しい試みを行つている。

現地では、土地造成の偉観と、ちよつど取付中のゴム防舷材、バッチャープラントなどを見学。再びバスにて関門国道工事事務所門司出張所に到着(16時)。同事務所にて工区長の説明を聞き入坑する。

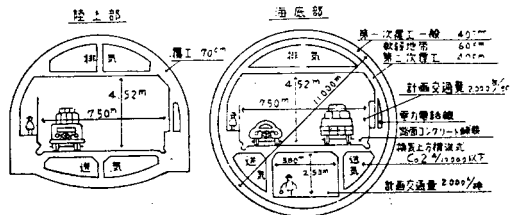
同トンネルはわづか700m弱の水をへだてて望む関門海峡の最短路、和布刈(門司)一壇之浦(下関)を結ぼうとするもので、その完成後には、年間125万台の車両、240万人の旅客が通過するといわれ、輸送経費の節約による利益は、年間約11億といわれている。同工事は、昭和14年度着工、管々として工事は進められ、トンネル総延長3460mのうち、現在進捗率はトンネル立坑を含め86.5%といわれる。

門司立坑より入坑した見学者は、調査トンネルを通り、本トンネルを見学しながら海底部780mを踏破。熱心な一団はさらに下関陸上部まで入坑し、約1時間にして下関立坑より出坑した。土木技術の粋を集めた

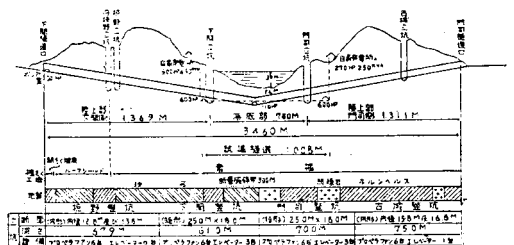
図一 北九州班見学略図



図二 関門トンネル断面図



図三 関門トンネル縦断面図



トンネル工事の壮観は、本見学会の最後を飾るものとして、必ず見学者の胸に強く刻みこまれたことであろう。予定時間を 30 分遅れ、17 時 30 分事務所前にて解散。盛沢山な見学会を無事終了した。なお参加会員 110 名であった。

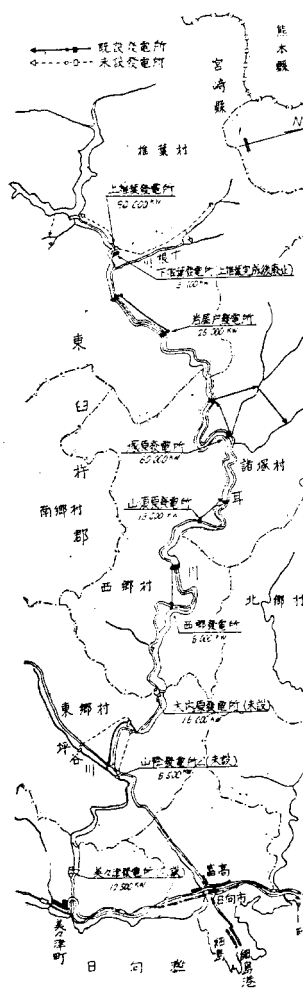
終りにのぞみ、この見学会に絶大な御援助を戴いた八幡製鉄、運輸省洞海湾工事事務所、同門司港工事事務所、建設省関門国道工事事務所、その他の関係各位に対し厚く御礼申上げる。(和田幹事 記)

D 班(上椎葉班)

土木学会総会、年次学術講演会に引続き昭和 30 年 5 月 30 日、31 日の両日にわたり九州電力上椎葉アーチダム建設工事の見学を行った。幸いにして両日ともに好天に恵まれ各見学場所における主務者側の行届いた歓迎により、大きな効果をおさめ得たことは非常に喜ばしいことであつた。5 月 29 日博多発夜行で出発翌 30 日早朝日豊本線富高駅着。駅前受付で鹿島建設の御好意による朝、昼 2 食分の弁当を戴き貸切バスに乗車一路上椎葉に向う。途中 1 時間余で目下九州電力で工事中の大内原発電所建設事務所に着、ここで一旦下車九州電力熊川土木部長、松本大内原建設所長より工事概要の説明を聴取した。この発電所は耳川本流既設 5 発電所の最下流に位置する九州最初のダム式発電所で出力最大 16 000 kW、この完成により上椎葉貯水池の運用と相まつて九州のピークロード発電所として一大偉力を発揮することとなる。目下昭和 31 年 7 月末完成を目標に左岸の掘削取水口以下発電所の掘削コンクリート打設を急いでいる。なお本工事は間組の請負になり労働基準局のモデル事業所として指定されている。

約 30 分間で見学を終り再び乗車、途中塚原ダムにて小憩の後支流十根川にかかる那須橋を渡りいよいよめざす上椎葉の工事現場へ入る。工事竣功も間近なためか行き交うトラックも工事用機械を満載し次の工事現場へ移るのが見られ一抹の寂しさを感じる。しばらくして塗装の色も真新しい鉄管路、発電所を窓外に見ながら上椎葉建設事務所に着、一同定められた旅館で旅装を解き昼食後、午後 1 時より熊川土木部長、緒方建設事務所長の約 30 分間にわたる工事沿革並びに苦心談に耳を傾け今更ながらわが国最初のアーチダム工事に心血を捧げた九州電力各位の熱意と努力に頭の下る思いがした。それから参加人員 38 名は 2 班に分れ待機中のトラックに分乗、田島次長、野田工事課長の案内で現場見学に向う。車が椎葉の街並をはずれたかと思ふ間もなく忽然として出現したアーチダム背面の姿に一同声を呑み暫時呆然たる有様。始めて見るアーチダムの偉容に感慨無量であつた。工事用仮設備を一望

図-4 耳川水系一覽図



にして車は徐行しながら原石山に向う。提体コンクリート量約 350 000 m³ の大半をまかなつた原石山は今や山体を止めず取り残された岩肌を無残にむき出している。さらに車は工事用道路を廻りダム下流左岸沿いに位置するクラッシングプラントに到着、徒歩にて第一次工場より第四次工場に至る一連の膨大なる設備をふかんしながらダム右岸に到着す。幾多の難関を経て誕生した定角型アーチダムが満々たる水をたたえながら重力式ダムには見られないスマートな姿を現わし神々しくらいである。堤高 110 m、

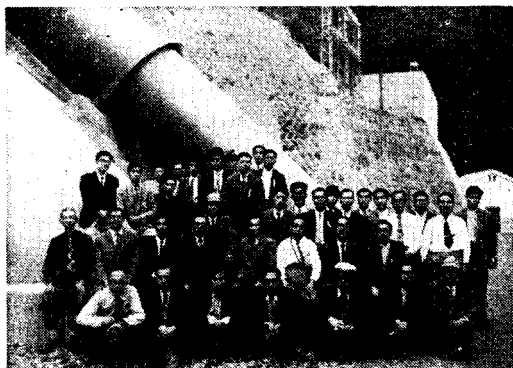
弧長 330 m、ダム両側に特異のスキージャンプ式余水路を有するこのアーチダムはわが国最初のアーチダムであるため九州電力が設計施工の万全を期するため O.C.I. と技術援助契約を締結、幾多の難関を克服して作り上げた技術の結晶である。この成果は特にわが国土木技術の向上に百尺竿頭を進めたもので同慶にたえない。一同感慨無量の思いに駆られ計画満水面まで 14 m を残した湖水を眺めながら将来九州縦貫道路の一翼を担うダムを左岸に渡り取水口で記念撮影ののち再びトラックに分乗発電所に向う。

山腹を迂回して設けられた運搬道路を河岸に下り発電所前で下車、松尾発電所長の案内で地上二階地下三階の所内をくまなく見学す。去る 5 月 25 日仮使用許可を得て営業運転に入りその後順調な運転が続けている。発電機は今日は 70 000 kW の針を指しその発電電力は発電所に併設する耳川総合変電所にて 230 kV

に昇圧し九州のロードセンター福岡近郊山家まではるばる 133 km の新中央幹線により送電されている。梅雨を間近に控え日ならずして最大出力 90 000 kW の発電を示すことである。

これらあらゆる土木技術の粋を尽して建設された上椎葉の見学に早朝より、延々 80 km を 4 時間あまりバスにゆられた強行軍に、いささか疲れを覚えたがつつがなく一日の見学を終えることができた。見学を終り一同鉄管路の前で記念撮影、篠原理事より一同を代表して終始お世話願った九州電力能川土木部長ほか各位に謝辞をのべ意義ある見学会はつつがなく全行程を終了したのであつた。

写真—6 上椎葉班記念撮影



明日は各自自由行動とし、一夜をひえつき節の吟しようにひたりながら平家の落人の夢を椎葉の宿に結んだのであつた。翌日午前 10 時半思い出多き椎葉の山々を後にし帰途に向つた。終りに臨み見学場所関係の方々多大なる御援助を賜つたことに対し厚く感謝の意を表する次第である。参加者合計 44 人であつた。(下津幹事 記)

E 班 (大牟田班)

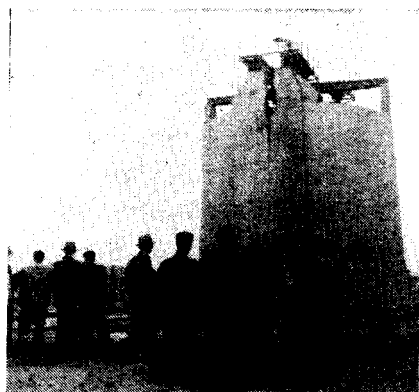
氣遣われた空も都合よく高曇りの絶好の見学日和である 30 日、予定の 7 時 30 分には参加者一行 16 名の見学班ができ上り、大牟田行急行電車の人となつて、定刻の 8 時西鉄福岡駅を出発した。途中二日市で 1 名を加えた一行 17 名は一昨年の大洪水で猛威を振つた、そして今は静かに流れる筑紫次郎の雄姿を眼下に眺め、九州の藪倉たる筑後平野を一路南下して 9 時 22 分大牟田に到着した。

大牟田駅では三池港務所よりの出迎えを受け、あらかじめ準備された乗用車 4 台に分乗して三池港務所へと向つた。ここでは同港務所杉山施設課長の案内で、三池炭とそれに関連した物資の輸出入港としての人工港の概要説明を聞き、まず同港御自慢の 18 万 t の貯炭能力のあるという広大な貯炭場に、約 1 km に近

いベルトコンベヤー及び三池製作所の設計製作になる 400 t/h の能力を持つスタッカー (堆積機) とジブローダー (積込機) とが一貫して操作される現場を見学し、その設備の威容に参加者一同眼をみはつた。昭和 29 年 10 月完成された同施設は非常に良好な成果を発揮しているという。次にかの有名な三池港に移つた。干満の差約 5.5 m の遠浅地に掘削浚渫して築造された 135 000 m² の船渠は特有のマイターゲートでもつて常時 8.5 m 以上の水深を保ち約 1 万 t 級の船を横付けできるということである。11 時一たん同社の港クラブに引返して、三井鉱業所森田建設部長の出迎えを受け、真紅のじゆうたんに映えるロビーで、同部長より、これから見学する人工島初島の概要の説明を聞く。

同島は三池炭田の探炭伸展の打開策として、大牟田の海岸より約 2 km 隔てられた海上に建設された堅坑で、直径 120 m 高さ 10 m の人工島である。三池炭田は、その陸地部を掘りつくし、その掘進尖端は海底部へ数 km も進んでおり、その掘進換気の必要から、この人工島が考案されたのだそうで、その施工に当つては、気象調査はもちろん、地耐力試験、粒度分析、圧密試験、せん断試験等あらゆる試験と綿密な測定を行いつつ実施したという苦心のほどを拝聴した。その後同社心尽しの昼食に舌つづみを打ち、また隣市坂田荒尾市長の懇切なる歓迎に感謝しつつ、12 時 10 分いよいよ待望の人工島初島へと三池港の「はつしま丸」に乗つた。曇りがちの空も晴間をみせるほどの天気になり、ますますカメラのシャッターが繁く鳴る。三池港口に現在施工中の第二人工島を左に眺め、遠く霞む雲仙の山々を背景とした静かな有明湾を船は迂つてゆく。淡黄色の海面にポッカと浮んで見える白い初島の景色はまことに平和そのものであり、この海の海底でツルハシを振っている抗夫への新鮮な空気を、あの初

写真—7 初島立坑現場



島から送っていることを考えるとまことに不思議な気がする。40分にして船は初島の東岸に到着した。

木樁の間をくぐり抜けて上へ出ると建設当時の器具の基礎と思われるコンクリートの点在する外は円い島の中央に聳えているコンクリート円筒だけが唯一の施設として眼につく。この直径 8~9m 高さ 10m 程度の巨大な円筒が、この地下約 200m の坑道に新鮮な空気を送風しているのだそうである。コンクリートと間知石とででき上った強固なこの島は昭和 24 年 11 月着工し、総工費約 1 億 2000 万円を投じて昭和 26 年 8 月に竣功したもので、その苦勞のあとが忍ばれる。かくして世紀の人工島に別れをつけて一路大牟田港に急いだ。大牟田駅にて、ここまでの参加者 7 名とも別れて一行は 10 名となり熊本市へ向つた。

熊本では県土木部差廻しのバスで一昨年の 6 月一瞬にして熊本市を一面泥土と化してしまつた白川の傷痕と、その力強い復旧の工事現場を見せて頂き、さらに熊本城と水善寺を見学、名将加藤清正公の築城技術に感歎の吐息をもらし、湧水の秘境に陶醉しつつ、県土木部長の歓迎晩餐会に臨んだ。佐分利土木部長の心からの歓迎に疲れを癒し、熊本情緒を満喫してつつがなく見学会の幕を閉じた。(大平幹事 記)

◎定例常議員会(昭.30.5.25) 出席者:青木会長、菊池副会長、川口、神田、田原、馬淵、三上、三木の各常議員、安芸、草間、生野、那波、米元の各名誉員、三浦、稲浦、平井の各前会長、兼重、片平、篠原の各理事、委任状 33 通で過半数出席と認め常議員会成立、議事:1) 昭和 30 年度会長、副会長、理事を選挙、開票の結果、次のとおり決定した。

会長	菊池 明	建設省、建設技監
副会長	種谷 実	日本国土開発 KK 取締役副社長
理事	河北 正治	建設省道路局国道課専門官
”	柴橋 種造	日本国有鉄道施設局管理課長
”	畠山 正	通商産業省公益事業局水力課長
”	平井 敦	東京大学教授、工学部
”	山本 三郎	建設省河川局治水課長

2) 昭和 29 年度事業報告案(兼重理事説明)を承認、3) 昭和 29 年度決算報告案(片平理事説明)を承認、4) 土木学会事務所敷地ほぼ確定につき移転承認、報告:1) 関東地区常議員半数改選の結果報告、2) 支部長更迭報告その他。

◎第 13 回理事会(昭.30.5.8) 出席者:青木会長、藤井副会長、兼重、江里口、後藤、星埜、片平、篠原の各理事、中川書記長、朝倉、椿箸、堀内の各主任、

議事:1) 4 月中の行事その他報告、2) 後任理事候補者について、3) 昭和 29 年度事業報告及び決算報告案について、4) 関東地区常議員改選開票日は 5 月 12 日、立会者は江里口理事とする。5) 常議員会を 5 月 25 日正午開催、6) 総会及び懇親会次第について、7) 土木用語常識事典(仮称)編集計画案は次回にゆずる、8) 日本工業標準調査会基本部会製図専門委員会臨時委員の推薦は、製図規格委員長に一任、9) 日本学術会議内に土質基礎工学連絡委員会設置方推進について、10) その他。

◎各種委員会

1. 会誌編集委員会(昭.30.5.23) 出席者:青木会長、最上、後藤正副委員長、河上(代樋浦)東北地方委員、坂本、吉川、森、三上、三木、斎藤、長浜、西畑、山本、丸安各委員、中川書記長、徳平幹事、岡本編集部員。協議事項:1) 会誌および論文集進捗状況報告、2) 投稿論文および新規受付論文審査委員の決定、3) 依頼原稿について、4) 編集委員交代について、5) 討議依頼先について、6) 40 巻 7 号登載論文を次のとおり予定した。

岩塚良三:水道鉄管のモルタルライニングに関する研究、村山朔郎:粘土の粘弾性について、安中久二:抵抗線ひずみ計による長期測定について、友永和夫・橋本香一:ランガー飯桁の応力のたわみの実測およびその解法、田所秋芳・村山保:特殊粘土混入によるコンクリートの品質改善について、菅原操:ノモグラムによる PC 鋼線緊張作業。

2. 第 12 回会誌抄録委員会(昭.30.5.12) 出席者:左合委員長、林、渡辺(隆)、渡辺(修)、中村各委員、千秋幹事、徳平編集幹事、岡本編集部員。協議事項:1) 40 巻 6 号登載用として 6 編を予定し割当 8 ページ²⁾ 繰越 13 編、新規 1 編について協議した、3) 30 年度新委員を決定した。

3. 学会誌編集小委員会(昭.30.5.12) 出席者:後藤副委員長、丸安、三木両担当委員、徳平幹事、岡本編集部員。協議事項:40 巻 6 号会誌編集について最終的決定を行つた(110 ページの予定)。

4. 第 1 回海岸工学委員会(昭.30.5.6) 出席者:青木会長、上野理事、本間委員長、福岡、太田尾、新妻、鶴田(代浜田)、肥後、石原、真嶋、田中、永井、佐島、粟津、堀川の各委員、鈴木、嶋野、安芸(代近藤)渡部の各顧問。議事:1) 青木会長の委員会発足についての挨拶、本間委員長の委員会設立主旨説明、2) 幹事を 5 名とし、2 年交代とする。石原藤次郎、佐藤清一、山内一郎、石井靖丸、○肥後春生、(○印幹事会世話役) 3) 委員の追加、猪瀬寧雄、竹内良夫、浜田

徳一の諸氏, なお, 農林省, 国鉄, 海洋気象台関係は委員長から交渉し, 決定の上一括委嘱のこと。4) 本年度の事業計画, (1) 用語集の編集は小委員会を設け, その委員として鶴田, 岸, 田中, 岩垣, 肥後, ○堀川の6氏にお願いすること(○印小委員会世話役)。(2) 研究発表会: 本年度は11月中旬を予定し, 論文公募を9月中旬とする。(3) 外国文献の収集, 翻訳とりまとめ。(4) 毎月1回幹事会を開き, 必要に応じ在京委員会を随時, 全体委員会は年1回とする。5) 委員会の財源として次のものを見込んでいる。(1) 文部省, 建設省, 運輸省, 農林省等の研究費補助金, (2) 港湾協会, 防災協会よりの協賛金(本年度は各20万円の見込)。

5. 法面築堤崩壊防止研究委員会(昭.30.5.21) 出席者: 沼田委員長, 最上, 星埜, 高坂, 宮崎の各委員, 伊崎, 齊藤, 三木, 八十島, 和仁, 渡辺, 別所, 尾崎, 高橋, 原口の各幹事, 小椋山, 逸見, 安東, 山田, 針生の各関係者, 中川書記長, 堀内主任書記, 議事: 昭和29年度最終報告書について協議。

◎その他

1. 日本工学会 大会準備打合せ(昭.30.5.2) 星埜理事出席, 議事: 行事担当学会は土木, 建築, 水道の3学協会で8月頃までに原案作製のこと, 定時総会(昭.30.5.23) 中川書記長出席, 全出席者は委任状を含み29名, 議事: 1) 昭和29年度会務報告承認, 2) 昭和29年度決算報告承認, 3) 昭和30年度事業計画案審議, 4) 同年度予算案審議承認, 5) 次期理事学会並びに理事の承認, 日本航空学会(倉西正嗣), 日本金属学会(石田四郎), 日本機械学会(板谷松樹), 水道協会(河口協介), 鉄道電化協会(小宮次郎), 日本化学会(岡俊平), 6) 次期監事学会の選挙(造船協会, 熔接学会), 7) 次期会長の選挙(加茂正雄君当選), 8) 加茂正雄君就任受諾挨拶。

2. 夏季講習会講師打合せ(昭.30.5.11) 出席者: 青木会長, 星埜, 片平両理事, 友永, 橋本, 田原, 川崎, 奥村, 川口の各講師, 中川書記長, 榊, 堀内各主任。打合事項: 1) 青木会長から講師に委嘱について挨拶ののち打合せに入り, 日程, 会場, 会の名称, 時間割等は下打合せのとおりとし, 各講師間の連絡, 2) 映画及び見学先について。

3. 関東地区常議員半数改選(開票昭.30.5.12, 立会者江里口理事), 投票総数873通, 当選者は次の9君に決定。齊藤迪孝, 村幸雄, 久保慶三郎, 石上立夫, 小倉宏三, 好井宏海, 肥後春生, 平嶋政治, 大串満馬。以上によって川口輝夫, 神田一雄, 田原保二, 田中倫治, 堀武, 三上恒, 三木五三郎, 丸安隆和, 山本三

郎の9君は退任, 五十嵐醇三, 五十嵐真作, 伊地知堅一, 田中叔造, 高野宗久, 西沢治, 林一幹, 馬淵寅雄, 松田勘次郎, 森茂の10君は留任された。

4. 文部省科学研究費配分打合せ(昭.30.5.24) 出席者: 青木, 安芸両委員, 東大(本間), 生研(星埜), 北大(今), 東北大(樋浦), 京大(石原), 金沢(小野), 阪大(田中), 広大(庄司), 九大(村上), 早大(兵藤), 中大(岩崎), 文部省広瀬科学官, 中川書記長, 榊庶務主任, 青木, 安芸両委員から日本学術会議における経過並びに研究費配分方針等を説明し, 各地方ごとの代表者が協議の上配分案を決定した。

5. 土質工学会では5月20日総会及び講演会を開催し, 新会長に藤井松太郎氏が選任された。

6. 日本建設機械化協会では5月27日定時総会を開催し, 新会長に内海清温氏が再び選任された。

7. 日本木材学会が創立せられ, 事務所を東京都目黒区下目黒林業試験場内に置いたとの通知に接した。

8. 日本学術会議第3回溶接研究連絡委員会(昭.30.4.22) 出席者: 本会推薦委員の成瀬, 奥村両君出席, 議事: 1) 本研究連絡委員会及び日本溶接会議の運営内規, 2) J.I.W. 年次大会への代表, 3) 金属材料の生産増強と品質改善に対する方策(委員会の運営規約及び日本溶接会議内規省略)。

9. 都市不燃化同盟では5月13日定例理事会, 評議員会及び総会を開催し, 議案全部原案を承認されたとの報告に接した。

10. 電気学会では役員改選の結果, 昭和30年度会長に工業技術院長駒形作次氏が選任された。

支部だより

1. 北海道支部 支部総会(昭.30.5.17) 議事: 昭和29年度事業報告及び決算報告承認(講演会3回, 見学会2回, 講習会1回, 研究発表会1回, 技術資料第9号発行, 決算額310100円), 2) 昭和30年度役員選出: (支部長) 瀬田一雄, (地区常議員) 古瀬正孝, 今俊三, 小川勝, (幹事長) 小川勝, (商議員) 柳内泰夫, 横道英雄, 松木憲司, 近藤重喜, 久世秀明, 伊福部宗夫, 瀬藤智雄, 田中幸男, 河原清一郎, 井上正夫, 永井寛, 真嶋恭雄, 板倉忠三, 野坂純三, 中村武夫, 中村稔, 宮前喜蔵, 内藤勝, 青柳晴一, 紺谷剛一。

2. 東北支部 幹事会(昭.30.5.17) 出席者: 市嶋幹事長以下8名, 議事: 5月20日開催の支部総会準備打合せについて, 支部総会(昭.30.5.20) 参加者: 約150名, 議事: 1) 新役員推薦有志会の経過報告, 2) 新役員の紹介, 3) 新支部長の挨拶, 4) 29年度事業経過収支決算及び30年度事業計画, 予算報告, 5)

写真—8 東北支部総会にお
ける宮本支部長挨拶

写真—9 東北支部総会記念講演



写真—10 東北支部総会懇親会



記念講演として坂本貞雄氏の米国のトンネル工事についてスライドを併用して約2時間半にわたる講演があった。終つて午後6時から市内ブラザー軒で懇親会を開催した。参会者80名でまず宮本支部長の挨拶があり、鶴見顧問の音頭で一同乾杯し、会食に移り、宴たけなわになるに及んで鶴見顧問を皮切りに佐藤、平井各常議員、鈴木、樋浦各商議員及び講演者坂本氏のテーブルスピーチがあり、一層の興趣を添え、最後に鶴見顧問の発声で万才を3唱し、8時盛会裡に散会した。支部役員：(支部長)宮本保(地区常議員)照井隆三郎、鷲尾蟹龍、藤村久四郎、(商議員)原田干三、千葉岩、高野太郎、宇野実、小池啓吉、樋浦大三、中村俣治郎、佐藤信一、三浦文次郎、北村市太郎、牧野茂、広川伝二、高畑政信、矢崎道美、(幹事長)市嶋武視、(幹事)中村武三郎、吉田栄延、駒林伝、草刈信夫、戸津光也、桑島忠。

3. 中部支部 支部役員：(支部長)杉戸清、(地区常議員)梶谷薫、荒井利一郎、竹重貞蔵、井上幸太郎、堀場敏一、足立貞嘉、(顧問)田淵寿郎、永田民也、花井又太郎、立神弘洋、石川栄次郎、松本金吾、大林勇治、(評議員)奥田秋夫、熊本政晴、青笹慶三郎、仁科太郎、紙谷齊治、鬼丸忠雄、小林庄平、竹重貞蔵、荒井利一郎、永井時一、結城朝恭、石田二郎、松見三郎、前田一三、鈴木誠一、堀場敏一、吉田朝次郎、田中武夫、河西清、加藤英司、河合秀夫、関一雄、渡部時也、鶴銅孝造、芳賀公介、足立貞嘉、中谷茂一、伊藤政恵、大谷新太郎、姫野勘治郎、水野太賀、(幹事長)鈴木和平、(幹事)樽井常忠、小村宏、上野実昭、戸田福三郎、島山実、野原真幸、岡田淳、石井興良、渡辺新三、増田重臣、小野一良、青山武雄、井上幸太

郎、谷重幸、栗田亀造、村瀬清、長谷川亘、藤本得、早川増一郎、土方大武、長坂一彦、白井実次、松本邦頭、河辺義郎、宮脇潤、(世話役)山崎外司男、西尾武喜、山内新之助、第1回幹事会(昭.30.4.26)出席者：杉戸支部長、鈴木幹事長他幹事17名、議事：1)前年度よりの事務引継について、昭和30年度予算及び行事予定について、3)その他、第1回役員会(昭.30.5.7)出席者：杉戸支部長他役員37名、議事：1)昭和30年度役員選任について、2)昭和30年度予算及び行事予定について、3)その他、第2回幹事会(昭.30.5.7)次回講演会並びに見学会について協議した。講演会(昭.30.5.21)参会者約80名、講演題目：中共より帰りて(元ハルピン大学教授大崎虎二)、映画：サイロ建設におけるスライドフォーム工法について(名古屋港管理組合提供)。

4. 関西支部 第1回役員会(昭.30.4.30)出席者：高西、鈴木元支部長、近藤支部長、磯野、田中、梅村、森本、三好、久保田、小松、岡田、奥田、松下各商議員、成岡幹事、議事：1)昭和30年度改選役員について(別項のとおり決定)、2)その他。

支部役員(支部長)野田誠三、(地区常議員)藤森謙一、田中清、矢野勝正、光井三郎の4君新任、江藤智、永井重雄、三宅静太郎の3君留任、(商議員)平野竹次郎、小林正雄、水沢勲、奥田正雄、岡田清、三好宗逸、橋本利一郎、久保田敏一、行松光雄、梅村吉朗、前島健雄、田杉進一、森本得一、松田仁、の14君新任、神田雄次君転出の後任として網本克己君を委嘱、辻川秀夫、久保直志、田中清、森正英、親谷貞己、加藤康平、磯野博、松下伸一、雨宮広二、小松雅彦、畑中元弘、加藤清治、の12君留任。

(幹事長) 浦上衛門, (幹事) 雨宮広二, 松下伸一, 松尾新一郎, 太田稔。

参加者 48 名, 見学会は花園一皿池間地下鉄工事現場で参加者 47 名, 懇親会参加者 24 名。

第 28 回支部総会(昭.30.5.11) 総会及び講演会の

昭和 30 年 5 月分入退会報告(昭.30.5.1~5.31)

1. 入 会	222 名(特 2 級 1, 正 24, 准 55, 学生 142)
2. 退 会	46 名(正 24, 准 19, 学生 3)
3. 転 格	386 名(准より正へ 27, 学生より准へ 359)

会 員 現 在 数(昭.30.5.31 現在)

名誉員	賛助員	特別員	1 級	2 級	3 級	正 員	准 員	学生員	総 計	増加数
20	16		32	78	151	4 415	6 915	1 195	13 822	176

優 良 取 次 書 籍 案 内

書 名	著 者	発 行 所	定 価	送 料
日本発電用高堰堤要覧	通産省公益事業局 水力課編	発電水力協会	1 500	100
ダム建設の機械化		日本建設機械化協会	1 500	100
日本建設機械要覧(1953)		"	2 500	100
港 工 学	鈴木雅次	風 間 書 房	1 800	90
港湾施設の設計計算例	米 川 実 男	"	1 200	70
セメント注入	渡辺 貫(外 2 名)	松 尾 書 店	400	50
コンクリートマニュアル	近 藤 泰 夫 訳	国 民 科 学 社	500	50
土 質 力 学	最 上 武 雄	岩 波 書 店	250	30
隧道の施工	佐 藤 周 一 郎	白 亜 書 房	750	50
土木耐震学	物 部 長 穂	理 工 図 書 K K	400	50
地耐力調査法	池田俊夫(他 1 名)	鉄 道 現 業 社	140	20
鋼橋の理論と計算	吉 町 太 郎 一	石 崎 書 店	1 800	100

昭和 30 年 6 月 10 日 印 刷

昭和 30 年 6 月 15 日 発 行

土木学会誌 第 40 卷 第 6 号 定価 100 円

編集兼発行者 東京都千代田区大手町 2 丁目 4 番地 中 川 一 美
印刷者 東京都港区赤坂溜池 5 番地 大 沼 正 吉
印刷所 東京都港区赤坂溜池 5 番地 株式会社 技 報 堂

東京中央郵便局区内 千代田区大手町 2 丁目 4 番地 電話和田倉 (20) 3945 番
4078 番

発行所 社 団法人 土 木 学 会 振替東京 16828 番

土木学会刊行物

土木工学論文抄録 第3集	A 4判 230頁	実費 500円 会員特価250円	(送料 70円)
“ 第4集	A 4判 173頁	“ 450円 会員特価225円	(“ 70円)
“ 第5集	A 4判 378頁	“ 1200円 会員特価800円	(“ 80円)
土木学会論文集 第3号	B 5判 183頁	“ 160円	(“ 30円)
“ 第4号	B 5判 134頁	“ 200円	(“ 30円)
“ 第5号	B 5判 140頁	“ 250円	(“ 30円)
“ 第6号	B 5判 140頁	“ 250円	(“ 30円)
“ 第9号 (小西博士)	B 5判 9頁	“ 20円	(“ 10円)
“ 第10号 (岡本博士・久保慶三郎)	B 5判 18頁	“ 40円	(“ 10円)
“ 第14号	B 5判 54頁	“ 120円	(“ 10円)
“ 第15号 (結城博士)	B 5判 9頁(英文)	“ 60円	(“ 10円)
“ 第17号 (猪股俊司)	B 5判 90頁	“ 250円	(“ 20円)
“ 第18号	B 5判 66頁	“ 120円	(“ 10円)
“ 第20号 (広長・八島・坂野)	B 5判 40頁	“ 150円	(“ 10円)
“ 第21号 (星埜博士)	B 5判 27頁	“ 130円	(“ 10円)
“ 第22号 (小林博士)	B 5判 22頁	“ 100円	(“ 10円)
“ 第23号 (国分博士)	B 5判 18頁	“ 40円	(“ 10円)
“ 第24号	B 5判 82頁	“ 150円	(“ 20円)
“ 第25号 (小西博士・小松・大橋)	B 5判 28頁	“ 130円	(“ 10円)
“ 第26号 (高野博士)	B 5判 55頁	“ 180円	(“ 10円)
コンクリート標準示方書 (昭和26年度)	B 6判 266頁	“ 180円	(“ 30円)
コンクリート標準示方書解説	B 5判 167頁	300円 会員特価240円	(“ 30円)
最新土質工学	B 5判 138頁	“ 150円	(“ 30円)
土木製図基準 (I)	B 5判 46頁	“ 200円	(“ 30円)
昭和26年 夏季講習会パンフレット II 橋	B 5判 92頁	“ 200円 会員特価150円	(送料共)
昭和27年 夏季講習会パンフレット 建設機械化	B 5判 176頁	“ 300円	(送料 30円)
昭和28年 夏季講習会パンフレット プレストレストコンクリート と構造力学	B 5判 190頁	“ 300円	(“ 30円)
昭和29年 夏季講習会パンフレット 新材料と新工法	B 5判 130頁	“ 300円 会員特価250円	(“ 30円)
学術用語集 土木工学編	B 6判 416頁	実費 315円	(“ 35円)
土木工事写真集	A 4判 264頁	“ 1500円 会員特価1000円	(“ 100円)
第6回 年次学術講演会講演概要	B 5判 100頁	実費 150円 会員特価100円	(“ 20円)
第7回	B 5判 120頁	実費 200円 会員特価150円	(“ 20円)
第8回	B 5判 103頁	実費 150円	(“ 20円)
第9回	B 5判 115頁	“ 150円	(送料共)
第10回	B 5判 140頁	“ 150円	(“)
第11回	B 5判 207頁	“ 200円	(“)

土木工学叢書

(1) 杉戸 清著 下水道学(前編)	B 5判 258頁	定価 500円	(送料 70円)
(2) 福田 武雄著 木構造学(再版)	B 5判 243頁	“ 500円	(“ 70円)
(3) 広瀬 孝六郎著 下水道学(前編) 品切	B 5判 177頁	“ 450円	(“ 70円)
(4) 岡田 信次著 鉄道線路	B 5判 168頁	“ 350円	(“ 70円)
(5) 平井 敦著 鋼橋(1)(再版) 品切	B 5判 530頁	“ 1000円	(“ 80円)
(6) 横道 英雄著 鉄筋コンクリート橋 (再版)	B 5判 469頁	“ 1300円	(“ 80円)
(7) 杉戸 清著 下水道学(後編)	B 5判 238頁	“ 500円	(“ 70円)
(8) 岡本 舜三著 応用力学	B 5判 130頁	“ 350円	(“ 70円)

土木工学ハンドブック A 5判2206頁	クロス製	“ 3200円	(送料 80円)
“ “	革製	“ 3700円	(“ 80円)
分冊 { A 5判1170頁	クロス製上巻	“ 1800円	(“ 80円)
“ “ 1100頁	“ 下巻	“ 1700円	(“ 80円)